

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1369 集

は か た
博 多 163

—博多遺跡群第 210 次調査報告—

2019

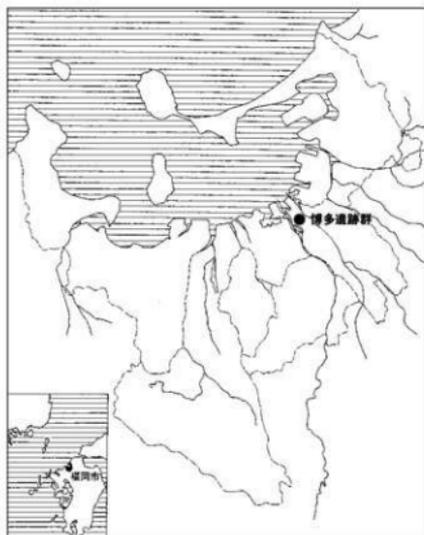
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1369 集

H A K A T A

博 多 163

—博多遺跡群第 210 次調査報告—



遺跡略号 HKT-210
調査番号 1639

2019

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は、納骨堂建設に伴い博多区祇園町地内で実施した博多遺跡群第210次調査の成果を取ったものです。

今回の調査では、平安時代後期から鎌倉時代前期の大溝、平安時代後期の井戸、土坑、柱穴などを検出しました。特に大溝は博多の町割りの変遷を考えるうえで、貴重な資料です。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、宗教法人 萬行寺様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は、納骨堂建設に伴い福岡市博多区祇園町地内において実施した博多遺跡群第210次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP 井戸 SE 竪穴建物 SC 溝 SD 土坑 SK
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は木下博文・山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は山崎賀代子が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より6°20'西偏する。
8. 中国産陶磁器の分類は、以下の文献によった。
太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府の文化財第49集 2000
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 1639	遺跡略号 HKT-210	分布地図番号 049 天神
所在地 博多区祇園町	調査面積 385.0㎡	
調査期間 2016.2.1～6.22		

本文目次

第1章はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	
第1面	4
溝	
井戸	
土坑	
その他	
第2面	23
井戸	
土坑	
溝	
竪穴建物	
包含層出土遺物	31
第1面～2面掘り下げ時	
3 まとめ	34
図版1～17	

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1/25000)	2
図2 周辺調査地点位置図 (S = 1/3000)	3
図3 調査地点位置図 (S = 1/1000)	3
図4 調査区第1面平面図 (S = 1/200)	5
図5 SD01土層断面実測図 (S = 1/80)	6
図6 SD01西端部上層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)	7
図7 SD01中央部上層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)	8
図8 SD01東端部上層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)	9
図9 SD01西端部下層出土遺物実測図 (S = 1/3)	10
図10 SD01中央部下層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)	11
図11 SD01東端部下層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)	12
図12 SD32および出土遺物実測図 (S = 1/80、1/3、1/2)	12
図13 SE02・03・30・39・61実測図 (S = 1/60)	13
図14 SE02出土遺物実測図① (S = 1/8)	14
図15 SE02出土遺物実測図② (S = 1/8、1/3、1/2)	15
図16 SK13・16・40・43・44・45・47実測図 (S = 1/60)	16
図17 SK31・33・34・35・36・37実測図 (S = 1/60)	17
図18 SK33出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)	18
図19 SK34・35・37出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)	19

図 20	SK52 および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3)	20
図 21	SX51 実測図 (S = 1/20)	21
図 22	SX51 出土遺物実測図 (S = 1/4)	22
図 23	調査区第2面実測図 (S = 1/200)	24
図 24	SE05・09 実測図 (S = 1/60)	25
図 25	SE08 および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/2、1/1)	26
図 26	SK04 および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3、1/2)	28
図 27	SK06・11・15・17・23 および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3、1/2)	29
図 28	土坑・溝および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3、1/2、1/1)	30
図 29	包含層出土遺物実測図① (S = 1/3、1/2、1/1)	31
図 30	包含層出土遺物実測図② (S = 1/3、1/2)	32

図版目次

図版 1	1区 第1面全景 (北西から) SD01 (西から)				
図版 2	SD01 土層断面1 (西から) SD01 土層断面2 (西から) SD01 中央部 底面遺物出土状況 (南東から) SE02 (南西から) SE03 (北西から)				
図版 3	1区 第2面全景 (北西から) SE05 (南東から) SE09 (南から) SE08 検出状況 (北東から) SE08 (南東から)				
図版 4	SK04 遺物出土状況 (東から) SK04 (南から) SK06 (北西から) SK11 (南東から) SK15 (東から) SK17 (北から) SK23 (南東から) SK25 (東から)				
図版 5	SK27 (南東から) SD19・22 (西から) SD20 (北東から) 2区 第1面全景 (北西から)				
図版 6	SD32 (北から) SK31 (西から) SK33 (南から) SK34 (東から) SK35 (西から) SK37・38 (西から) SK40 (西から) SK42 (南から)				
図版 7	SK43 (南から) SK44 (南から) SK46 (東から) SK47 (西から) SK52 (東から) SE61 (西から) SE30 (北から) SE39 (北西から)				
図版 8	SX51 (南西から) SX51 (南東から) 2区 第2面全景 (北西から) SK36 (西から) SK41 (北東から)				
図版 9	SK48・49・50 (西から) SK55 (南西から) SK57 (北から) SK57 西 鉢出土状況 (北から) SK58 (北から) SK59 (北東から) SD56 (南から) SX54 (東から)				
図版 10	出土遺物 1	図版 11	出土遺物 2	図版 12	出土遺物 3
図版 13	出土遺物 4	図版 14	出土遺物 5	図版 15	出土遺物 6
図版 16	出土遺物 7	図版 17	出土遺物 8		

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成28(2016)年10月19日付で、宗教法人萬行寺より博多区祇園町地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた(事前審査番号28-2-623)。申請地は博多遺跡群の範囲内であることから、協議の上、平成29(2017)年1月10日に試掘調査を実施し、現地表面下140cmで遺構を確認した。今回の工事は納骨堂建設で杭打ちを伴い、埋蔵文化財への影響が避けられないことから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成29(2017)年1月末に現物提供により、調査範囲の矢板打ちとバックホーによる表土の掘取り・場外搬出を行った後、2月1日に機材搬入、以降人力による遺構の検出・掘削に着手した。順次遺構の検出・精査・写真撮影・実測を進め、平成29(2017)年6月22日に機材を撤収し終了した。

なお調査範囲は基礎工事が行われる建築物の範囲であり、それ以外については現状保存されている。

2 調査体制

調査委託 宗教法人萬行寺

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査 平成28～29年度 資料整理 平成30年度)

調査総括	経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課長	常松幹雄(平成28・29年度)
	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長	大庭康時(平成30年度)
	同課調査第1係長	吉武学(平成28・29・30年度)
庶務	埋蔵文化財課管理係	入江よう子(平成28年度)
	文化財保護課管理調整係	松尾智仁(平成29年度)
	文化財活用課管理調整係	松尾智仁(平成30年度)
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長	佐藤一郎(平成28年度)
	同課事前審査係主任文化財主事	本田浩二郎(平成29・30年度)
		池田祐司(平成28・29年度)
		田上勇一郎(平成30年度)
	同課事前審査係	大森真衣子(平成28年度)
		中尾祐太(平成29・30年度)
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係	木下博文

第2章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた3列の砂丘上に展開する弥生～近世に至る複合遺跡である。3列の砂丘の内、現在の呉服町交差点付近を境に博多湾寄りをおき(おきのはま)、内陸の2列を博多浜と呼称している。現状はJR博多駅から真っすぐ海側に向かって伸びる大博通りを中心とし、高層のマansion・ビルが立ち並ぶ中、古くからの町割りが残る区域となっている。

今回の調査地点は、祇園町交差点から西へ約300m、国体道路の南側に面する萬行寺境内の北東の一画に位置する。遺跡の中では博多浜の南西部、砂丘の頂部に当たる。萬行寺が所在する祇園町、国

体道路を挟んで北側に位置する冷泉町の境界は、これまで多数の発掘調査が実施され、重要な成果が続々と上がっている。

祇園町交差点付近では、甕棺墓が営まれている（24・36次）。

萬行寺の南東隣に位置する覚永寺境内では、古墳時代前期の布留式土器とともに鉄器製作時の鉄片が出土している（147次）。鉄の鍛冶滓・断面蒲鉾形の羽口などが出土している（65次）。それらが示す鍛冶精錬・鉄器製作の技術は当時最も先進的であり、現在博多でしか見られないものであることが認識されている。外部地域からの情報の流入拠点であることがうかがえる。萬行寺の南西、現キャナルシティ近辺では埴輪片が多量に出土しており、古墳の存在が想定されている（142次、171次、182次）。

古代には祇園町・冷泉町一帯に磁北に沿った区画溝が造営されており、官衙の存在が想定されている。

中世前半の鎌倉時代後期には、二度にわたる蒙古襲来後西海道警固のため鎮西探題が設置されたが、その候補地として現櫛田神社東側の地域が想定されている。

中世後半には、萬行寺の南側、現キャナルシティから博多区役所に至る地域に、博多の街の南外郭線として房州堀が開削されており、街の境界に近い場所といえる。

萬行寺境内では過去2回発掘調査が実施されている。いずれも今回の調査区の北側に隣接しており、国体道路に近いほうから3次、45次である。3次調査では東西方向の大溝、45次調査では4面の遺構面があり、箱銭（さしぜに）を納めた陶器鉢、穴をあけてお面とした土師器皿、古墳時代前期の堅穴建物、銅鐵などが出土している。

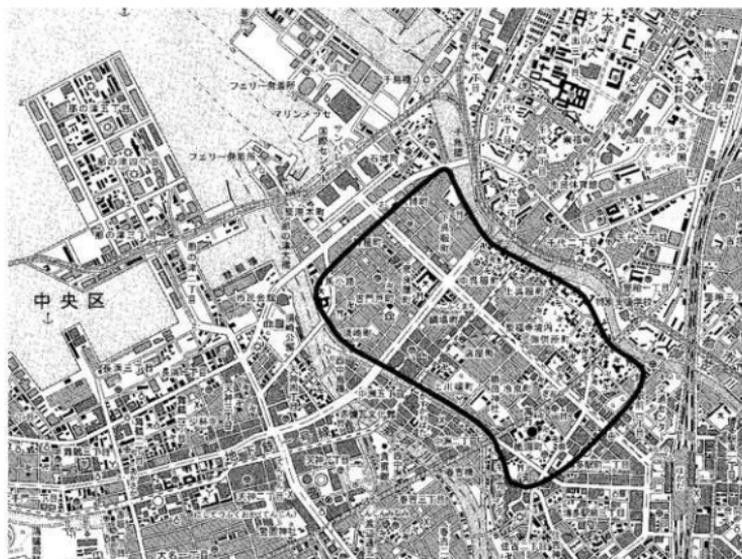


図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)

- 3次 『博多遺跡群第3次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第515集 1997
 24次 『博多Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第119集 1985
 36次 『博多13』福岡市埋蔵文化財調査報告書第228集 1990
 45次 『博多20』福岡市埋蔵文化財調査報告書第248集 1991
 65次 『博多37』福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集 1993
 142次 『博多102』福岡市埋蔵文化財調査報告書第848集 2005
 147次 『博多106』福岡市埋蔵文化財調査報告書第892集 2006
 171次 『博多129』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1041集 2009
 182次 『博多136』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1087集 2010

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の南西部に位置し、砂丘の頂部に当たる。現地表面の標高6.21～6.45mである。試掘調査では、現地表面下120cmより基盤となる黄褐色砂層までの間に4面の遺構面が認識されていた。そこで事前に現地表面下120cmまで表土鋤取りを行った。

調査区の外周は、東・西・南についてはH鋼と鋼板による矢板打ち、既存建物に接する北は法面掘削を実施している。この関係で外周にかかる井戸などの深い遺構は作業の安全のため、上面検出・一段下げに止め、完掘はしていない。排土は場内処理をする必要があることから、調査区を北と南に二分した。北半を1区、南半を2区とし、1区から調査を開始した。

しかし遺構面の清掃・精査の結果、江戸時代中期の墓石が含まれていたことから、鋤取りが不足していたことが判明した。そこで再度重機により現地表面下2mまで鋤取りした所、暗茶褐色砂質土層上面で中国製陶磁器が出土し始め、遺構の輪郭が見えたため、これを第1面として精査を開始した。標高4.2～4.5mである。第2面は黄褐色砂層上面で、標高3.4～3.7mである。これにより遺構面は当初想定4面から2面となった。

検出遺構は溝・井戸・土坑・ピットである。遺物は平安時代末期～鎌倉時代前期に相当する白磁や龍泉窯系・同安窯系青磁碗・皿、国内外産の陶器、土師器皿、ガラス玉、石球、鉄釘、カキ殻、古墳時代前期の古式土師器、銅鍍、弥生土器が出土している。総量はコンテナ123箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

なお表土鋤取り・包含層掘り下げに際し、20基に及ぶ近世の甕棺墓を検出した。『筑前名所図会』の萬行寺境内を現した図には、当該地点が松林になっているが、江戸期を通じて墓地であったようである。甕棺内には人骨や三途の川の渡し賃としての六文銭、櫛などが納められていた。これらについては協議の上調査終了後に萬行寺にお渡ししている。

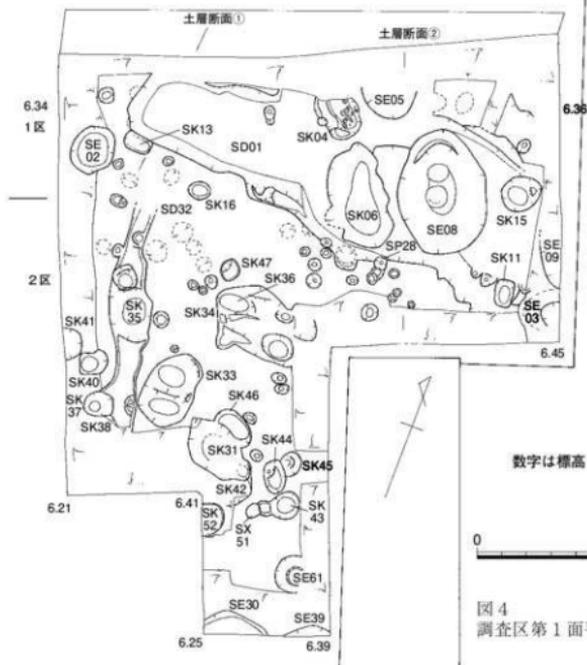
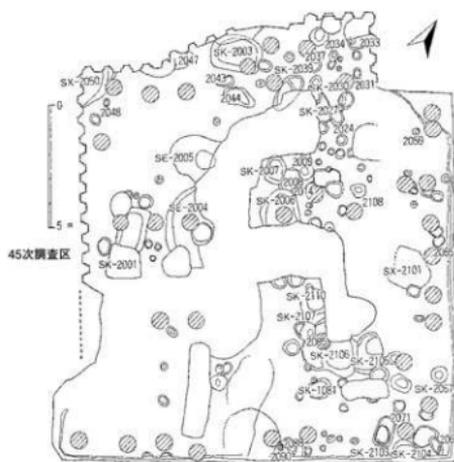
2 遺構と遺物

第1面

溝

1区

SDO1 (図4・5、図版1・2)



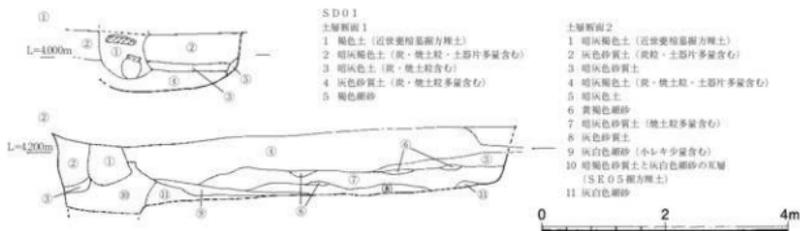


図5 SD01土層断面実測図 (S=1/80)

1区中央で検出した。検出長16m、幅6m、深さ1.0mの東西方向の大溝で、磁北に直交する。西端は途切れており、土橋のような通路、出入口のようにになっているが、既存の隣接建物との関係から設けた調査区法面の下および調査区外にかかるため、詳細は不明である。SE03に切られ、SK04・SE05・SE08を切る。

中国製陶磁器、土師器皿、鉄釘、銅銭など多種・大量の遺物が出土している。遺物の取り上げは、大溝の範囲を西端部・中央部・東端部に3区分し、さらに上・下の2層に分けて行った。以下の記述・遺物実測図の配置もそれに基づいている。

出土遺物

上層 (図6・7・8、図版10・11・12)

1～16は土師器である。1～10は皿で口径79～94cm、器高1.0～1.3cm、11～16は杯で口径134～150cm、器高28～38cm、淡橙または淡黄褐色を呈し、いずれも底部外面は回転糸切りと板状圧痕を残す。16は底部に二ヶ所の穿孔を施す。17・18は青磁碗である。17は復元口径162cm、器高62cm、高台径5.6cm、龍泉窯系Ⅱ-a類である。18は復元口径104cm、器高45cm、高台径42cmである。19・21は白磁碗である。19は口径166cm、器高60cm、高台径63cmである。21は復元口径172cm、器高62cm、高台径5.9cmである。20は施釉陶器の碗である。復元口径100cm、器高5.9cm、高台径42cm。見込みおよび口縁部外面に青白色、体部内面および畳付けを除く体部下半・底部に黒褐色の施釉をしている。22・23は土鍾である。22は長43cm、幅12cm、孔径0.35cm、褐色を呈す。23は長38cm、幅1.1cm、孔径0.3cm、浅黄褐色を呈す。24はガラス丸玉である。径0.8cm、厚さ0.4cm、孔径0.3cm、やや青みを帯びた白色を呈す。25・26は青磁皿である。25は口径9.8cm、器高26cm、底径3.2cm、龍泉窯系Ⅰ-2a類である。26は口径100cm、器高21cm、底径4.3cm、龍泉窯系Ⅰ-3a類である。27は白磁碗である。残存高21cm、高台径52cm、体部が切断されており、瓦玉に転用されたものとみられる。28は青白磁甕形合子の蓋である。29・30は土鍾である。29は片方の先端が黒灰色、他は浅黄褐色を呈す。30は灰褐色を呈す。31は土玉である。32はガラス棒である。残存長22cm、径0.2cm、濃緑色を呈す。33は北宋銭「祥符元寶」(大中祥符元年、1008)である。

34～36は土師器皿・杯である。淡黄褐色を呈し、いずれも底部外面は回転糸切りと板状圧痕を残す。37は天目碗である。体部上半・内面に黒褐色の施釉をする。38は白磁皿で、Ⅱ-2類である。39は青磁皿で、龍泉窯系Ⅰ-2c類である。40は白磁碗でⅡ-1類、口縁部の釉をかき取る「口禿」である。41は青磁碗で、同安窯系小碗Ⅰ類である。42は白磁甕形合子の蓋である。43は当て具状ミニチュア滑石製品である。重さ190g。44は短冊形石製品である。重さ1645g。45は北宋銭「治平元寶」(治

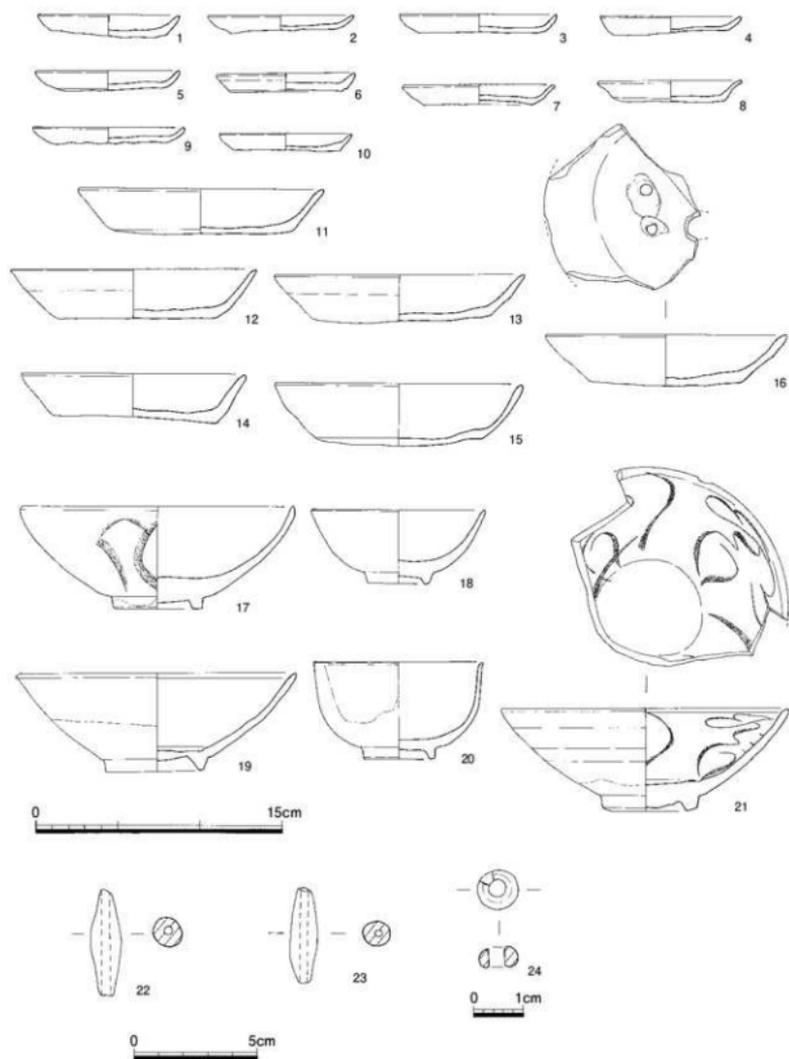


图6 SD01西端部上層出土遺物実測図 (S=1/3、1/2、1/1)

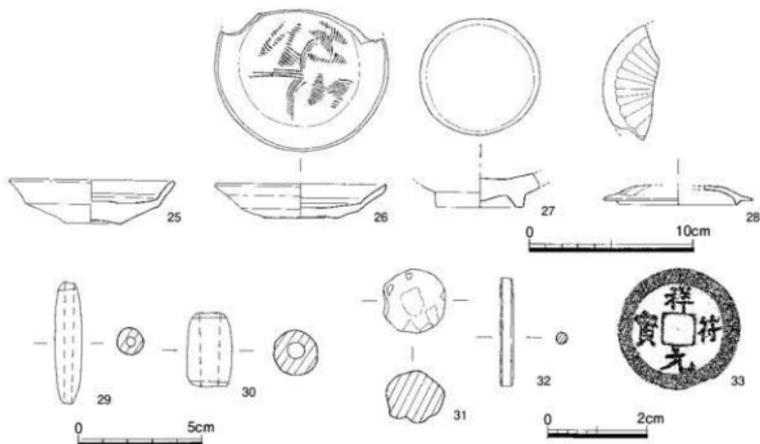


図7 SDO1中央部上層出土遺物実測図 (S=1/3、1/2、1/1)

平元年、1064)である。46は北宋銭「太平通寶」(太平興國元年、976)である。47は唐銭「開元通寶」(武德四年、621)である。

下層 (図9・10・11、図版12・13・14)

48～58は土師器である。48～55は皿で口径8.8～9.7cm、器高1.1～1.5cm、56～58は杯で口径13.4～14.4cm、器高3.0～3.2cm、48は褐色、53は淡橙色、58は灰褐色、その他は浅黄橙色を呈し、いずれも底部外面は回転糸切りと板状圧痕を残す。58は破断面を磨き、土板に転用している。59・60・64は白磁である。59は皿でⅢ-1類、60は椀でⅣ-3類である。64は皿でⅣ-2b類である。61～63は青磁で、61・62が椀、63が皿である。61は高台を打ち欠き、瓦玉に転用している。62は龍泉窯系I-4a類である。63は同安窯系I-2b類である。65は陶器の長胴壺でIV-3a類である。66は青磁椀か。内部底面に四ヶ所、重ね焼きの目跡が残る。67は緑釉陶器の壺である。

68～79は土師器である。68～71は皿で口径8.7～9.2cm、器高1.0～1.2cm、72～79は杯で口径13.4～14.6cm、器高3.2～3.6cm、70が淡赤褐色、77が灰褐色、その他は浅黄橙色を呈し、いずれも底部外面は回転糸切りと板状圧痕を残す。79は底部に二ヶ所の穿孔を施す。80～82は施釉陶器である。80は鉢、81は水注でV-2a類、82は四耳壺でVI-1類である。83は滑石製錘である。残存長4.3cm、幅1.4cm、厚さ1.1cm、重さ130g。十字に切り込みを入れる。84・85は土鐘である。84は残存長3.6cm、淡橙色を呈す。85は長さ4.5cm、褐色を呈す。86は円形土板である。土師器皿の底部の転用とみられる。87は陶製の犬形である。全長5.6cm、高さ3.1cm、幅2.3cm。目・足・下腹部を除く体部外面に灰緑色の施釉をする。88は「皇宋通寶」(篆書体 宝元二年、1039)である。

89・90は土師器皿・杯である。いずれも浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切りと板状圧痕を残す。91は白磁で合子の蓋か。92は土玉である。93は皇朝十二銭の「萬年通寶」(天平宝字四年、760)である。94・95は青磁皿で、94は龍泉窯系I-2b類、95は同安窯系I-1b類である。

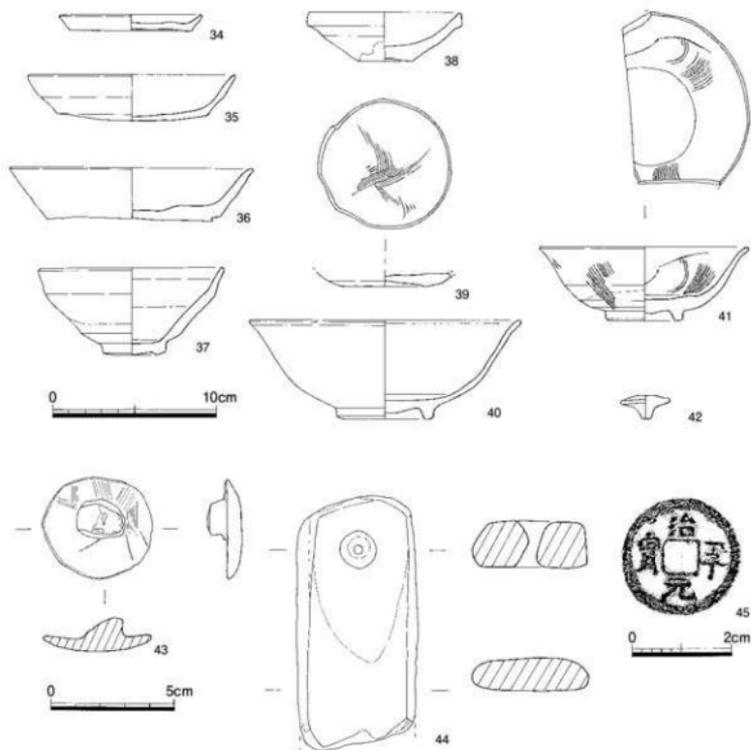


図8 SD01東端部上層出土遺物実測図 (S=1/3、1/2、1/1)

他に中央部下層から墨書「三十」・「綱カ」のある白磁椀高台片、銕着した2枚の銅銭が、東端部下層から耳部に「李」の押印のある白磁四耳壺片が出土している。ガラス塔塼片・石球・鉄釘多数が上・下層から出土している。

2区

SD32 (図12、図版6)

調査区西寄りで検出した。幅0.9～1.2m、深さ0.3～0.4mの南北方向で、1区第2面で検出したSD19と同一方向であり、両者は同一の溝とみられ、その場合検出長は11.8mとなる。SD01に切られる。

出土遺物 (図12、図版14)

89は土師器皿である。口径10.2cm、器高1.6cm、浅黄橙色を呈し、底部外面に回転糸切り・板状圧痕を残す。90・91は土錘である。90は長さ5.2cm、幅2.6cm、孔径1.0cmで、灰褐色を呈す。91は長さ8.1cm、幅2.1cm、孔径0.7cmで、灰褐色を呈す。

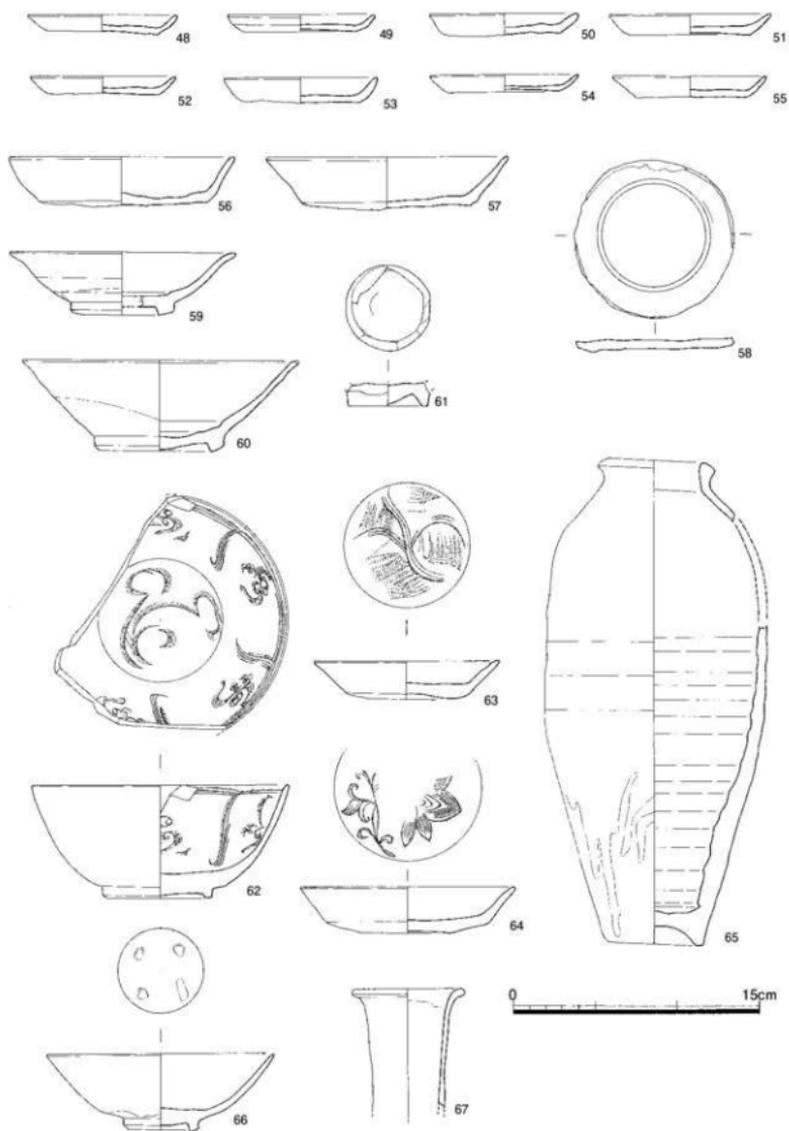


图9 SD01西端部下層出土遺物実測図(S=1/3)

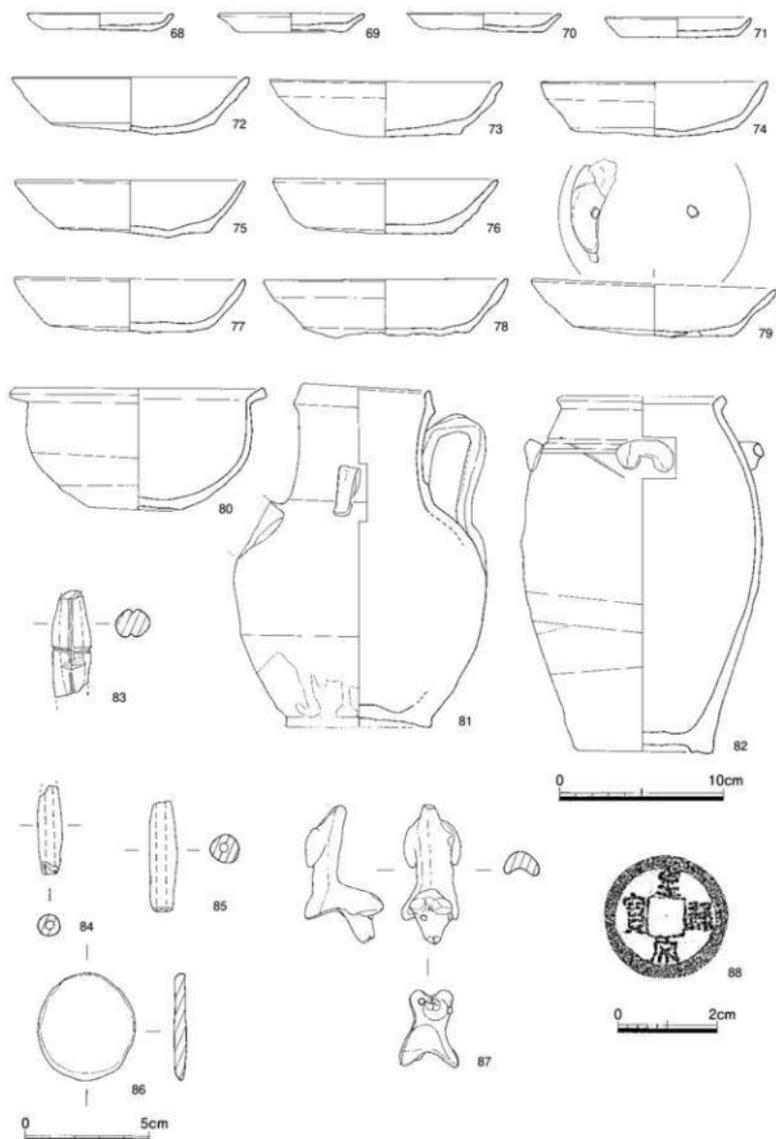


图10 SDO1中央部下層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)

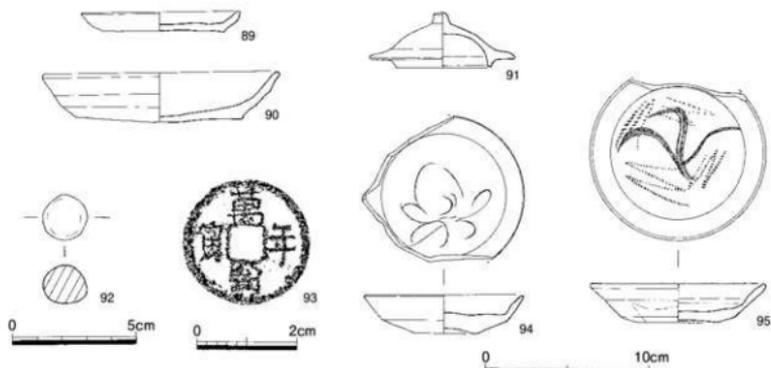


図11 SD01東端部下層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)

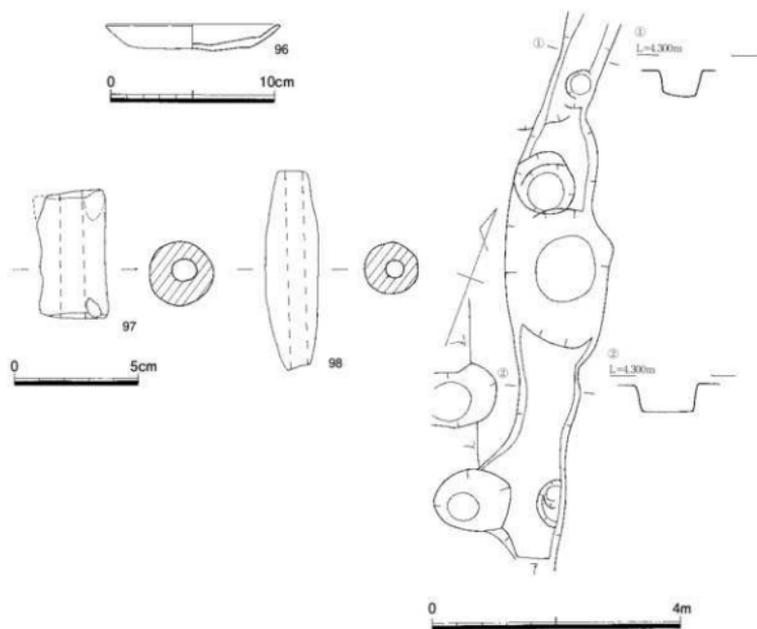


図12 SD32および出土遺物実測図 (S = 1/80、1/3、1/2)

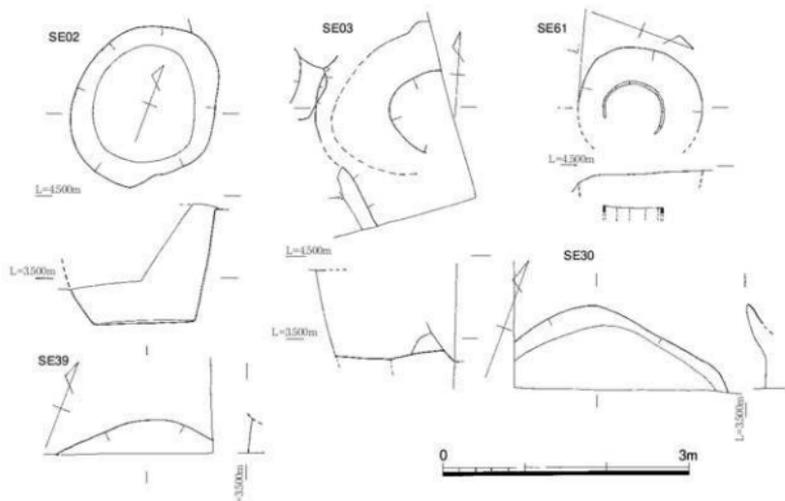


図13 SE02・03・30・39・61実測図 (S = 1/60)

井戸

1区

SE02 (図13、図版2)

1区西端で検出した。径20×1.7m、深さ1.4mである。

出土遺物 (図14・15、図版14)

99～107は中国産施釉陶器の四耳壺である。108は中国産陶器の鉢でI-1a類である。109・110は高麗陶器の壺である。111～113は須恵器の甕である。114は壺の破片が。突帯部は横なで、外面は横ヘラミガキを施し、赤い顔料が塗られている。115は未穿孔の滑石裂円盤である。重さ165g。

SE03 (図13、図版2)

1区東隅で検出した。SD01を切る。径3m以上、井戸側径2m、深さ1m以上である。作業の安全のため、掘り下げは行っていない。

2区

SE61 (図13、図版7)

2区南東隅で検出した。掘形の径1.5m、径0.7mを測る8枚の瓦組の井戸側を持つ。近世とみられる。

SE30 (図13、図版7)

2区南隅で検出した。検出長2.6m以上。作業の安全のため、掘り下げは行っていない。

SE39 (図13、図版7)

2区南東隅で検出した。検出長2.85m以上。作業の安全のため、掘り下げは行っていない。

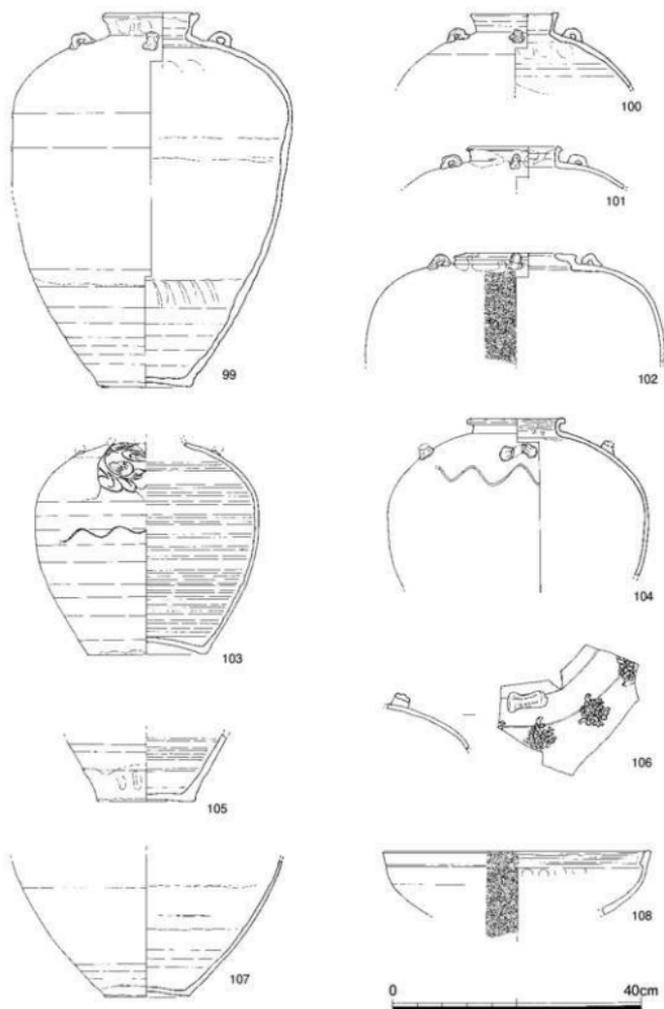


图14 SE02出土遗物实测图①(S=1/8)

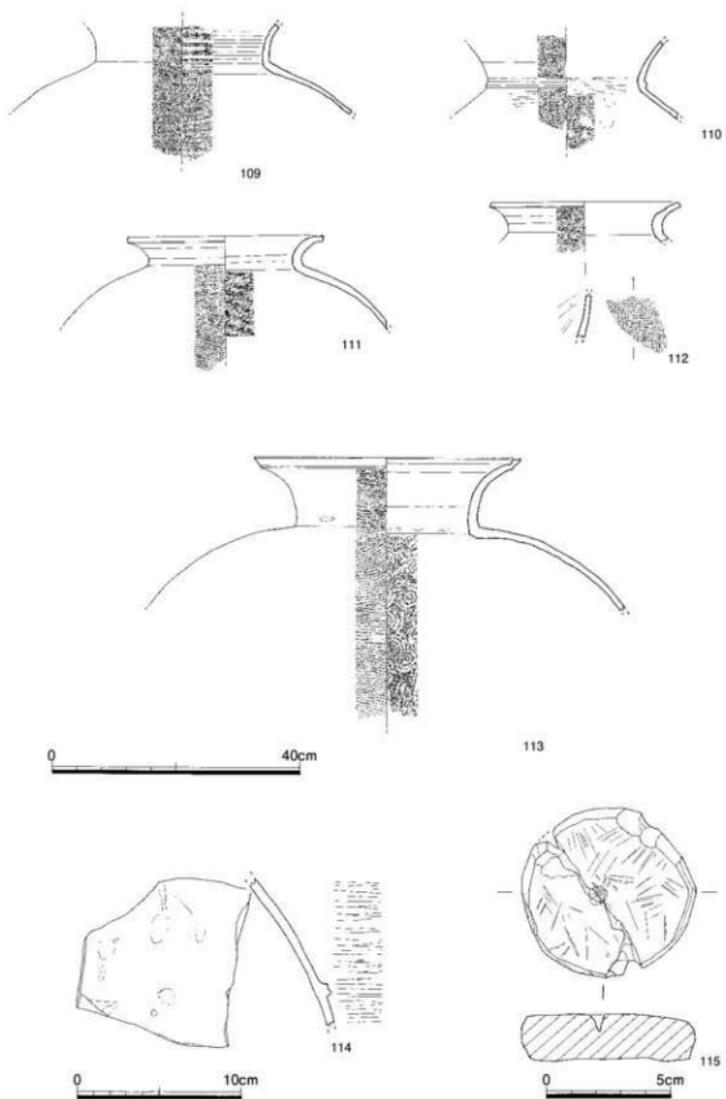


图15 SE02出土遺物実測図② (S=1/8、1/3、1/2)

土坑

1区

SK13 (図16)

1.12 × 0.55 m の方形で、深さ 0.18 m である。

SK16 (図16)

0.85 × 0.7 m の楕円形で、深さ 0.18 m である。

2区

SK31 (図17、図版6)

2.8 × 1.9 m の楕円形で、深さ 2.1 m 以上である。作業の安全のため、完掘は行っていない。

SK33 (図17、図版6)

3.1 × 2.1 m の楕円形で、深さ 1.5 m である。

出土遺物 (図18、図版14・15)

116 は土師器皿で、口径 9.0 cm、器高 1.3 cm、浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切り・板状圧痕を残す。底部中央に径 1.0 cm の穿孔がある。117 は瓦器椀である。118・119 は白磁椀である。118 はⅢ-0 類、119 はⅣ-1 a 類である。120・121 は青白磁平形合子の蓋・身である。122 はガラス小玉である。径 0.4 cm、厚さ 0.3 cm、孔径 0.2 cm で青緑色を呈す。123・124 は土錘である。123 は長さ 4.8 cm、幅 2.9 cm、孔径 1.45 cm で褐色を呈す。124 は長さ 3.7 cm、幅 1.85 cm、孔径 0.5 cm で橙色を呈す。他にガラス増埴片が出土している。

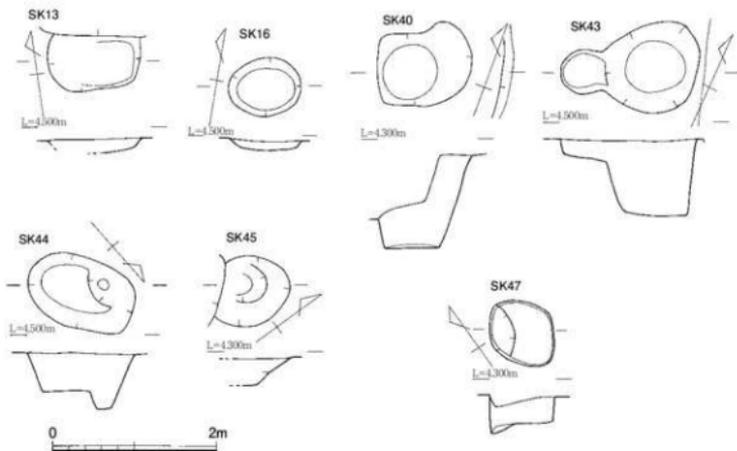


図16 SK13・16・40・43・44・45・47実測図 (S = 1/60)

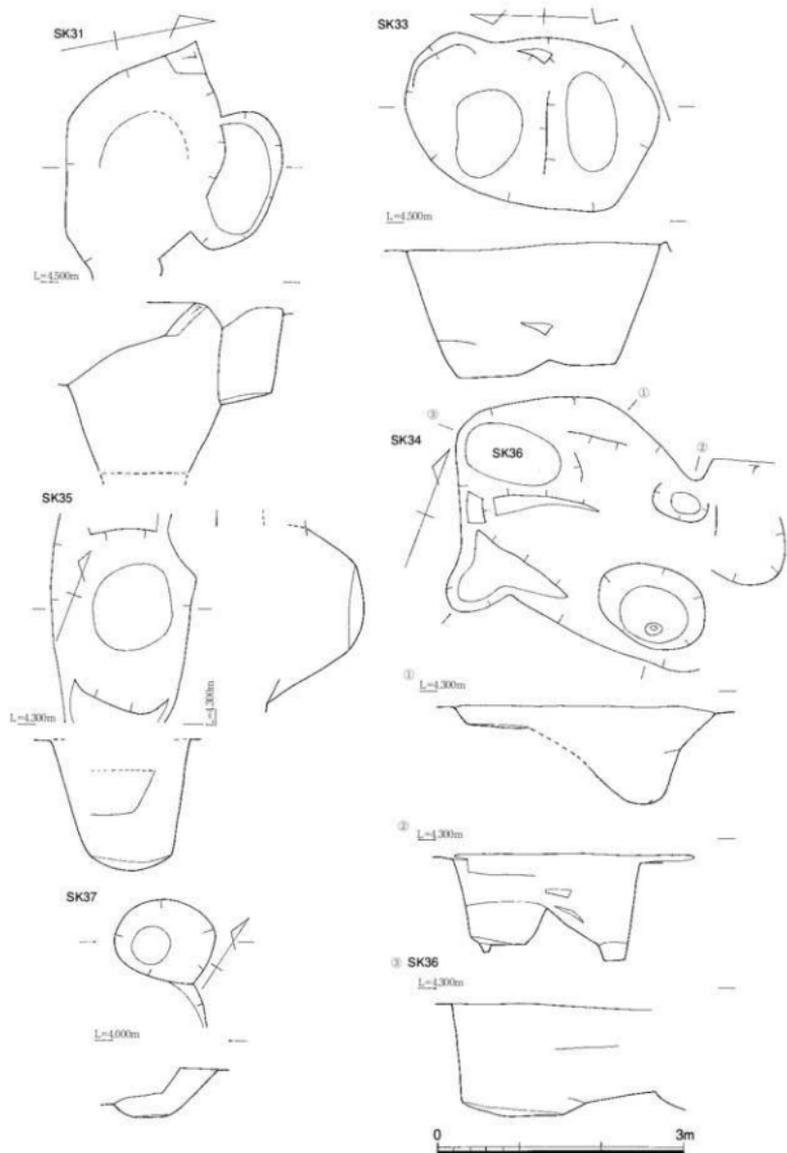


图 17 SK 31 · 33 · 34 · 35 · 36 · 37 实测图 (S = 1/60)

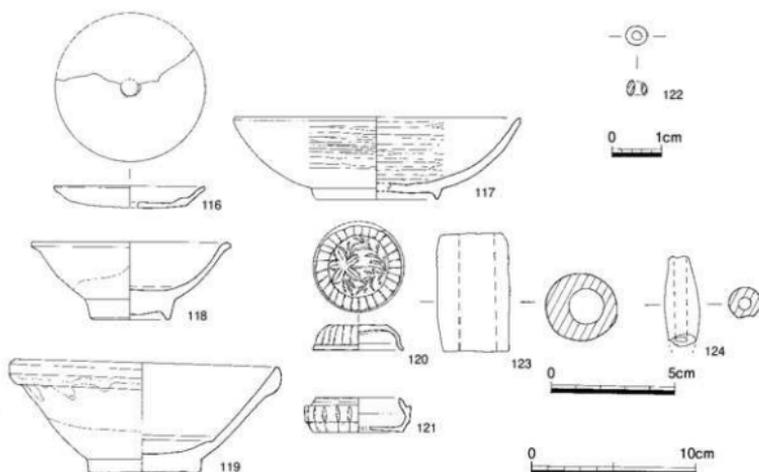


図18 SK33出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)

SK34 (図17、図版6)

南北2.6m、東西4mで、深さ1.2mである。作業の安全のため、完掘は行っていない。

出土遺物 (図19、図版15)

125～128は青磁碗で、龍泉窯系1-2a類である。129は土師器杯である。口径120cm、器高2.0cm、浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切り・板状圧痕を残す。他にガラス埴塼片が出土している。

SK35 (図17、図版6)

1.8×2.15mの楕円形で、深さ1.6mである。

出土遺物 (図19、図版15)

130は滑石製鍋のミニチュアである。復元口径8.2cm、器高8.1cm、重さ38.5g。体部に2ヶ所穿孔がある。

SK37 (図17、図版6)

1.0×1.2mの楕円形で、深さ1.0mである。

出土遺物 (図19、図版15)

131はガラス玉である。径1.5cm、厚さ1.2cm、孔径0.6cm、淡青緑色を呈す。

SK38 (図17、図版6)

SK37に切られる。深さ0.4mである。

SK40 (図16、図版6)

1.5×1.0mで、深さ1.1mである。

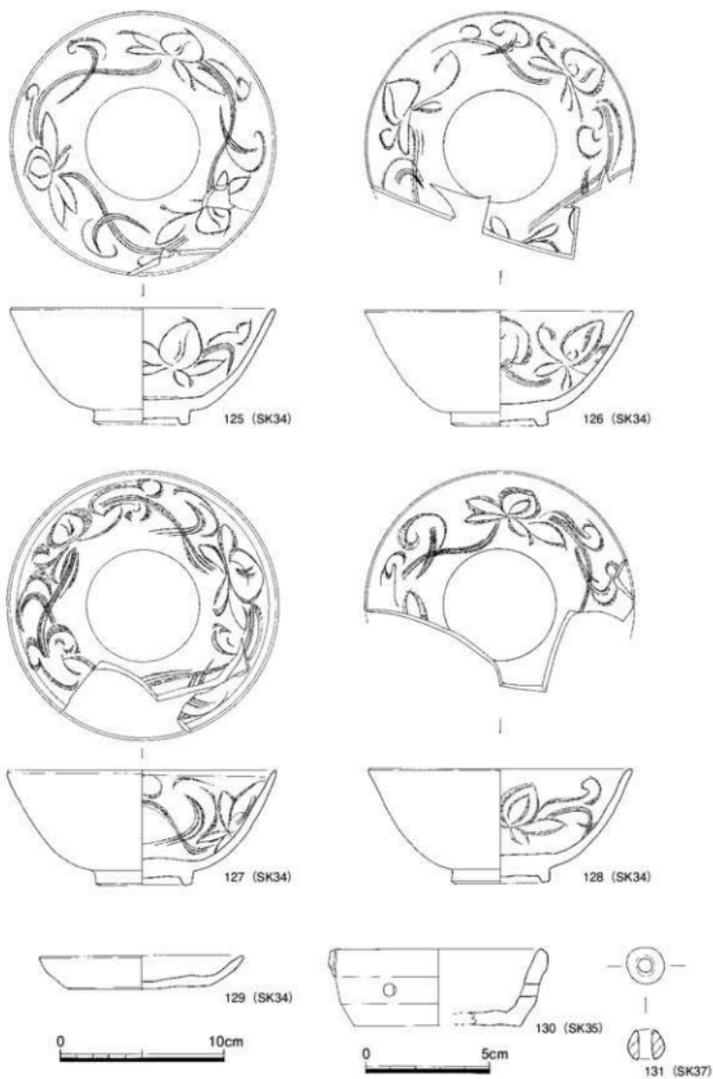


图 19 SK34·35·37 出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)

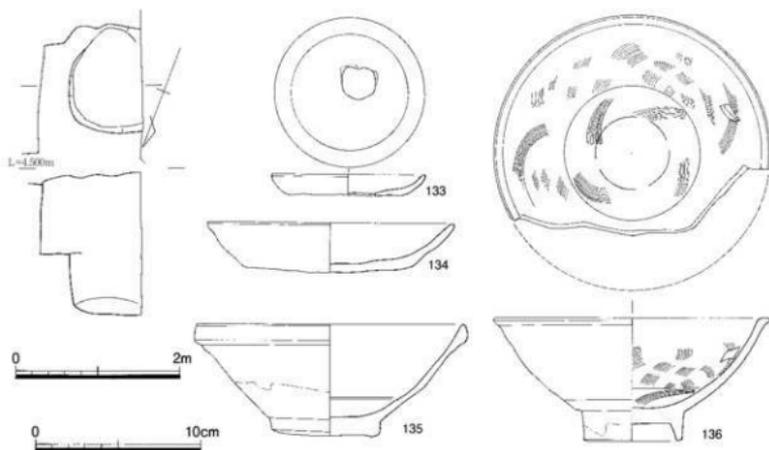


図20 SK 5 2および出土遺物実測図 (S = 1 / 60, 1 / 3)

SK 4 2 (図4、図版6)

1.75 × 0.7 m以上で、深さ0.8 mである。カキ殻多数・動物骨が出土している
出土遺物 (図版15)

132は白磁碗の底部片である。外面に「平」の墨書がある。

SK 4 3 (図16、図版7)

1.3 × 1.1 mの円形で、深さ0.9 ~ 1.0 mである。ガラス増埴片、動物骨が出土している。

SK 4 4 (図16、図版7)

1.3 × 0.9 mで、深さ0.66 mである。

SK 4 5 (図16、図版)

径0.9 mで、深さ0.38 mである。SK 4 4に切られる。

SK 4 6 (図17、図版7)

1.7 × 1.0 m以上の楕円形で、深さ1.13 mである。SK 3 1に切られる。

SK 4 7 (図16、図版7)

0.95 × 0.75 mで、深さ0.4 mである。

SK 5 2 (図20、図版7)

1.3 × 1.0 m以上の円形で、深さ1.7 mである。カキ殻多数、動物骨が出土している。

出土遺物 (図 20、図版 15)

133は土師器皿である。口径9.2cm、器高1.3cm、浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切り・板状圧痕を残す。底部に2cm大の穿孔がある。134は土師器杯である。口径14.8cm、器高3.0cm、浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切り・板状圧痕を残す。135・136は白磁碗である。135はⅣ-1a類、136はⅤ-4b類である。137は動物骨である。縦9.3cm、横6.0cm、厚さ2.9cmで切断痕がある。他にガラス増埴片が出土している。

その他

S X 5 1 (図 21、図版 8)

0.6 × 0.55 m、深さ0.3 mの方形土坑の上部に、固定用かともみられる石を置き、青磁碗9個体を重ねて埋納している。地鎮か。青磁碗の型式から12世紀中葉～後半、平安時代末期に属す。

出土遺物 (図 22、図版 15)

138～146は青磁碗で、龍泉窯系Ⅰ-2a類である。実測図の配置は上から下へ重なった順にしている。

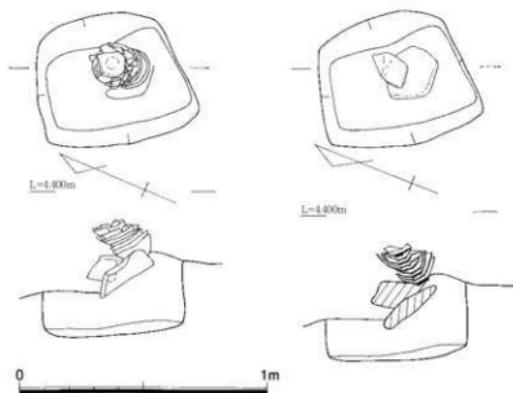


図 21 S X 5 1 実測図 (S = 1 / 20)

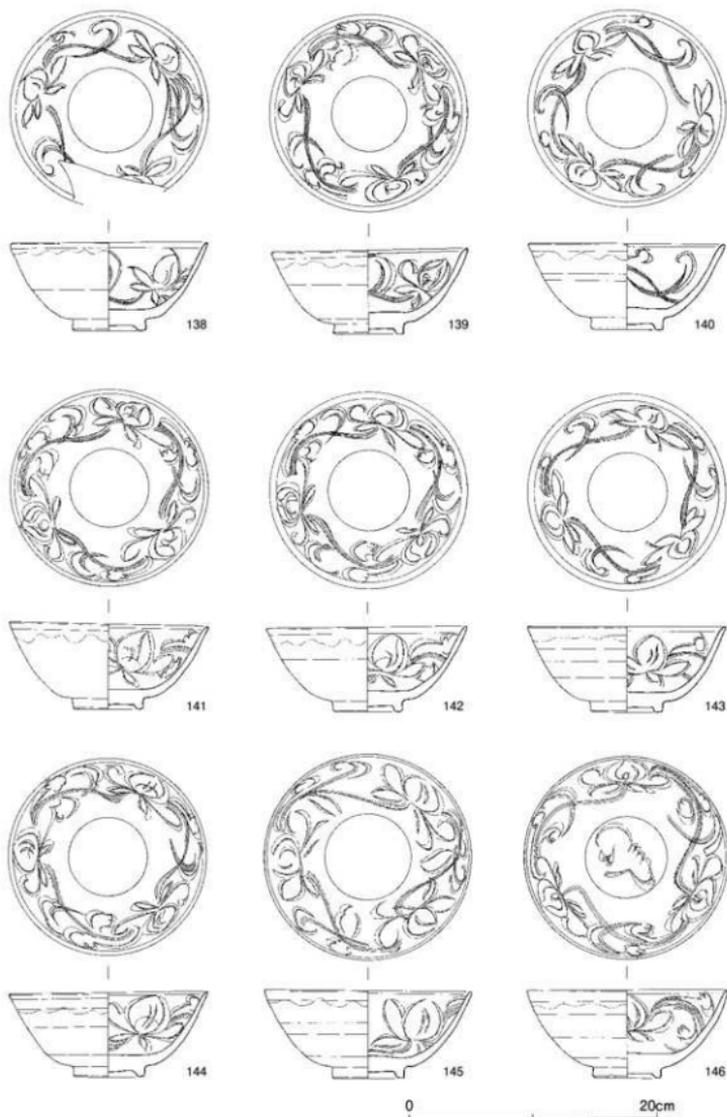


图 22 S X 5 1 出土物实测图 (S = 1 / 4)

第2面

井戸

1区

SE05 (図24、図版3)

1区北壁際で検出した。径2.2m、深さ1.2m以上。井戸側痕跡が断面にみられる。調査区北壁法面に
かかっており、作業の安全のため掘り下げは行っていない。判読不明の墨書木板片が出土している。

SE08 (図25、図版3)

SD01の掘り下げ後、底面で検出した。SD01の土層断面がわずかにかかっており、観察の結果SD01に切られている。径5.05×3.6m、深さ2.7m。径0.75～0.9mの井戸側痕跡を2ヶ所持つ。
中国製陶磁器のほか、銅銭が出土している。

出土遺物 (図25、図版15)

147は皇朝十二銭の「隆平永寶」(延暦十五年、796)、148は同じく「乾元大寶」(天徳二年、958)である。
掘形埋土の上層から出土した。149は用途不明銅製品である。縦長4.7cm、横幅3.0cm、厚さ0.3～0.4
cmである。150はガラス板片である。残存長3.4cm、残存幅2.8cm、厚さ0.25cm、青緑色を呈す。
151はガラス玉である。径7.2cm、厚さ5.2cm、薄い黄緑色を呈す。152は土玉である。153は棒
状土製品である。154は径2.8cm、厚さ0.4cm、重さ3.0gの平らな円形の石でおはじきまたは碁
石か。155は滑石製鍋である。156は草花文軒丸瓦である。157は白磁碗の高台片で、底部外面に「房」
とみられる墨書がある。他にガラス増塌片が出土している

151・152・154は井戸側内、150・155・157・ガラス増塌片は掘形埋土から出土した。

SE09 (図24、図版3)

1区東壁に接して検出した。検出長2m。作業の安全のため、掘り下げは行っていない。

土坑

1区

SK04 (図26、図版4)

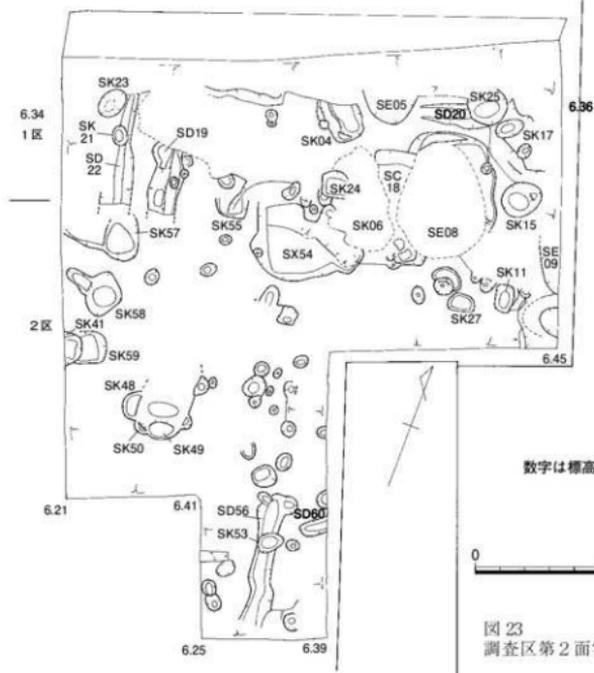
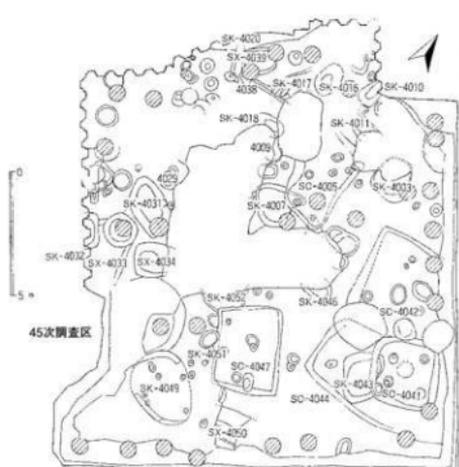
SE05の西隣で検出した。SD01に切られる。4.3m×3mの楕円形で、深さ1.1m。調査区北
壁に現れた土層断面では黄白色砂と暗灰褐色土の互層堆積となっている。上層から下層まで完形の土
師器皿を多数含む。

出土遺物 (図26、図版16)

158～170は土師器である。158～160は皿で口径8.7～9.3cm、器高1.0～1.4cm、161～170は杯
で口径1.20～1.50cm、器高2.6～3.7cm、いずれも浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切り・板状圧
痕を残す。169の底部外面には二羽の鳥または人の顔に見える墨絵が書かれている。171は白磁碗で甕
類である。172は青磁皿で同安窯系I-1b類である。173は天目碗である。174・175は青磁碗である。176
は土鍋の脚である。外面が黒色、断面が橙色である。177は土錘である。長さ50cm、にびい橙色を呈す。

SK06 (図27、図版4)

SK04、SE05の南東で検出した。長さ4.25×幅2.25mの不整楕円形で、深さ1.2mである。
出土遺物 (図27、図版16)



178～181は土師器である。178は皿で口径9.0 cm、器高1.3 cm、179～181は杯で口径13.8～15.3 cm、器高2.8～3.6 cm、いずれも浅黄褐色を呈し、底部外面は回転糸切り・板状圧痕を残す。182・183は白磁で182は碗、183は皿である。いずれも底部内面に重ね焼きのための釉の輪状掻き取り痕がある。184は土製品で、残存長8.4 cm、厚さ3.4 cm、胎土が粗く外面が橙色、内面が灰白色を呈し、上端面が平滑に仕上げられている。粗型に真土を貼った土製銅型片が。

SK11 (図27、図版4)

1.1 × 0.8 mの隅丸方形で、深さ0.24 mである。

SK15 (図27、図版4)

調査区北東部、SD01の底で検出した。1.6 × 1.4 mの楕円形で、深さ0.63 mである。出土した須恵器杯から奈良時代とみられる。出土遺物 (図27、図版16)

185は須恵器の杯である。口径12.7 cm、器高3.8 cm、底径8.7 cm、黒灰色を呈す。

SK17 (図27、図版4)

1.1 × 0.7 mの楕円形で、深さ0.49 mである。出土遺物 (図27、図版16)

186は土錘である。縦4.3 cm、幅3.0 cm、黒色を呈す。

SK21 (図28)

0.8 × 0.55 mの楕円形で、深さ0.35 mである。

SK23 (図27、図版4)

1.3 × 0.9 mの楕円形で、深さ0.93 m以上である。

SK25 (図28、図版4)

径1.5 mの円形で、深さ0.9 mである。

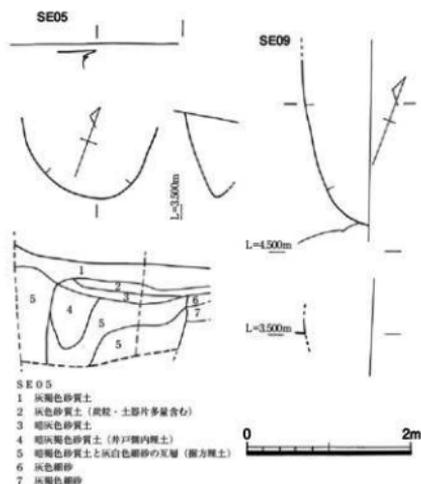


図24 SE05・09実測図 (S = 1/60)

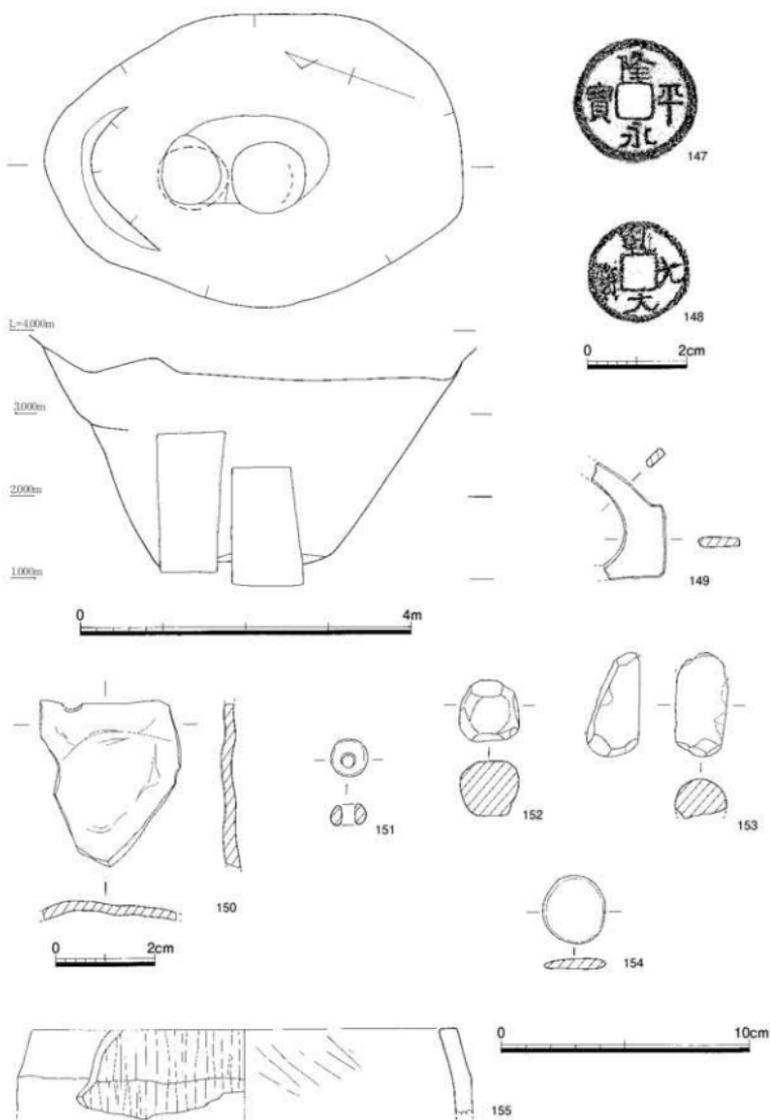


図25 SE08および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/2、1/1)

SK27 (図28、図版5)

1.05 × 0.7 mの隅丸方形で、深さ8 cmである。

2区

SK36 (図17、図版8)

SK34の底で検出した。1.6 × 0.9 mの楕円形で、深さ0.16 mである。古墳時代とみられる。出土遺物 (図28、図版16)

187は管玉の未完成品である。長さ1.2 cm、幅0.5 cm、緑色で断面六角柱である。188は青銅製鏃である。残存長3.6 cm、幅1.3 cm、厚さ0.4 cmである。

SK41 (図28、図版8)

1.4 × 0.7 mで、深さ0.8 mである。

SK48 (図28、図版9)

1.0 × 0.6 m以上で、深さ0.48 mである。

SK49 (図28、図版9)

1.3 × 0.7 m以上で、深さ1.0 mである。

SK50 (図28、図版9)

0.8 × 0.3 m以上で、深さ0.25 mである。

SK53 (図28)

1.15 × 0.7 mの楕円形で、深さ0.4 mである。

SK55 (図23、図版9)

1.2 × 0.8 m以上の方形で、深さ0.5 mである。

SK57 (図28、図版9)

1.3 × 1.8 m以上で、深さ1.0 mである。

SK58 (図28、図版9)

1.5 m四方の方形に長さ1.0 mの楕円形部が取り付く。深さ0.7 mである。

SK59 (図28、図版9)

1.3 m四方の方形で、深さ0.93 mである。

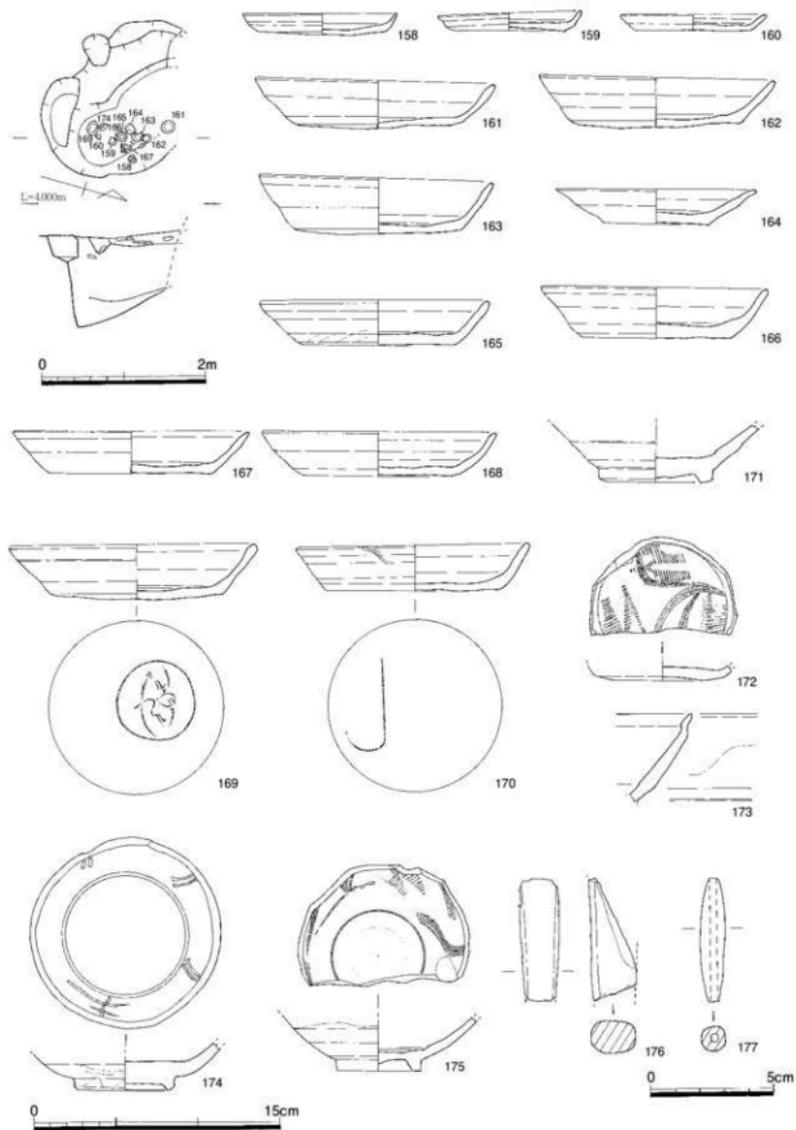


図26 SK04および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3、1/2)

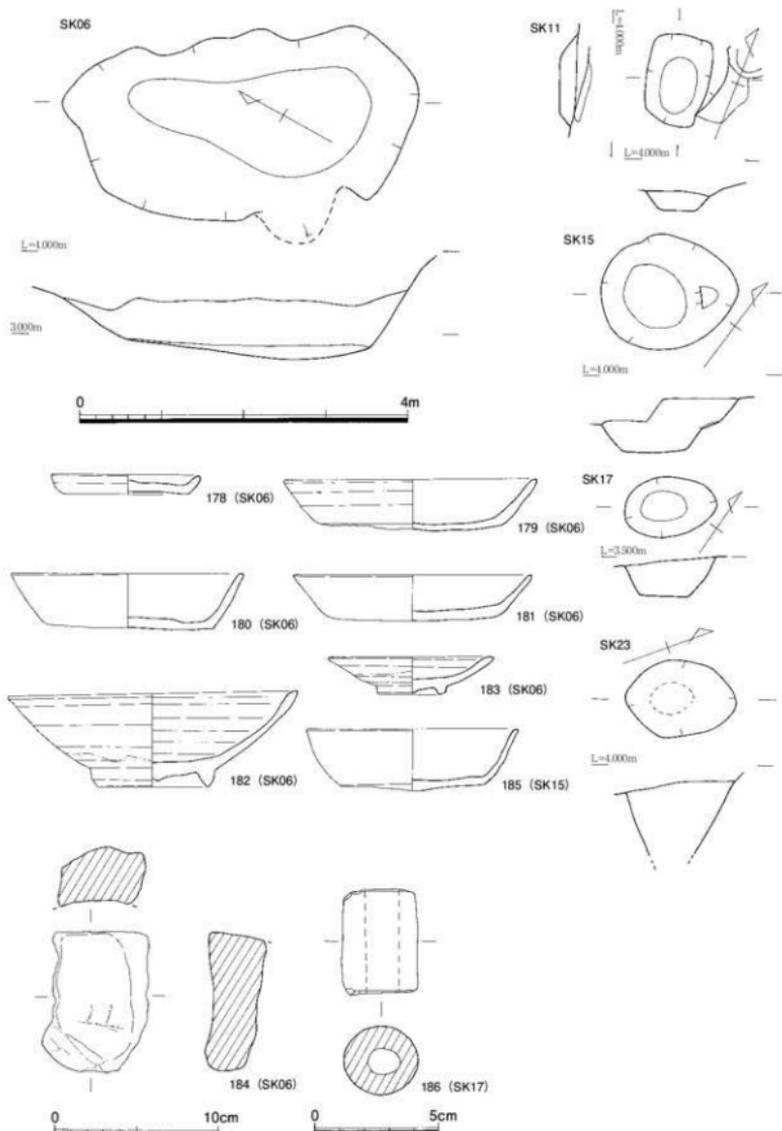


図27 SK06・11・15・17・23および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3、1/2)

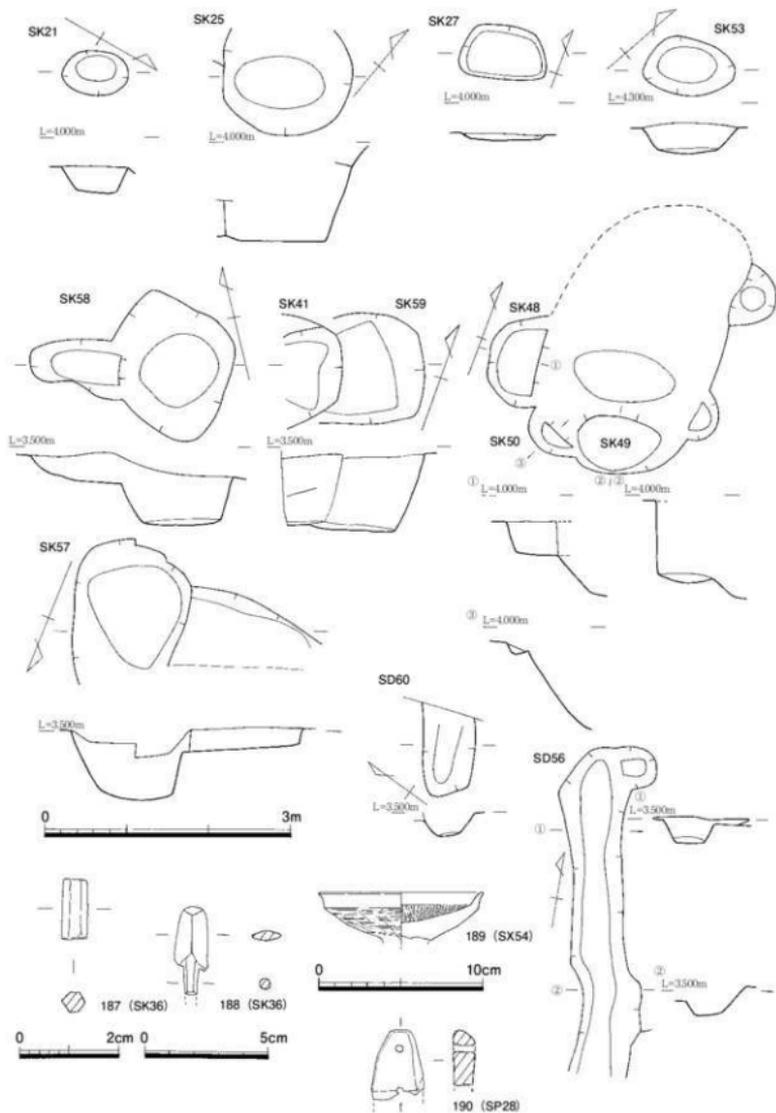


図 28 土坑・溝および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3、1/2、1/1)

溝

1区

SD19 (図23、図版5)

幅0.7m、深さ0.1～0.7mである。位置的にSD32と一連の溝とみられる。

SD20 (図23、図版5)

調査区北東隅で検出した。東西方向で、長さ2.2m、幅0.8m、深さ0.3mである。

SD22 (図23、図版5)

調査区北西隅で検出した。南北方向で、長さ4.6m以上、幅1.2m、深さ0.3mである。

2区

SD56 (図28、図版9)

長さ5.4m以上、幅0.9m、深さ0.2～0.3mである。

竪穴建物

1区

SC18 (図23)

SE08およびSK06に切られる。3.3m四方の方形になる。写真撮影・実測前の大雨により形が崩れてしまったため、深さは不正確であるが、約0.3mである。

その他

2区

SX54 (図23、図版9)

3.3×4.2m以上の方形の落ち込みで、深さ0.1～0.3mである。底面にピットなどの遺構は認められなかったが、平らで弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土したことから、竪穴建物の可能性がある。

出土遺物 (図28)

189は古式土師器の小型器台である。橙色を呈し、口縁部を強い横なでにより外反させ、体部下半の内外面に細いヘラミガキを施す。

ピット・包含層出土の遺物 (図28・29・30、図版16・17)

190は用途不明の石製品である。二ヶ所に穿孔がある。SP28出土。191～193は土師器皿である。いずれも底部外面に回転糸切り・板状圧痕がある。193には加えて木の葉のような痕跡がある。194は押圧文軒平瓦である。195は陶製経筒の蓋の擬宝珠である。196は青磁碗で、龍泉窯系II-b類である。197・198・204は古式土師器の小型丸底壺である。197・198は橙色を呈し、細いヘラミガキを施す。204は浅黄橙色を呈し、内外面などで調整である。199・200・205～208は土錘である。202は土師器杯である。底部外面に回転ヘラ切り・板状圧痕を残す。201・203・212は黒色土器B類碗である。体部の内外面に密に暗文を施す。209は用途不明の土製品である。灰褐色で二ヶ所に穿孔がある。210は青銅製の鉸(か)具(こ)である。縦3.6cm、横3.3cmである。211は棒状ガラス製品である。

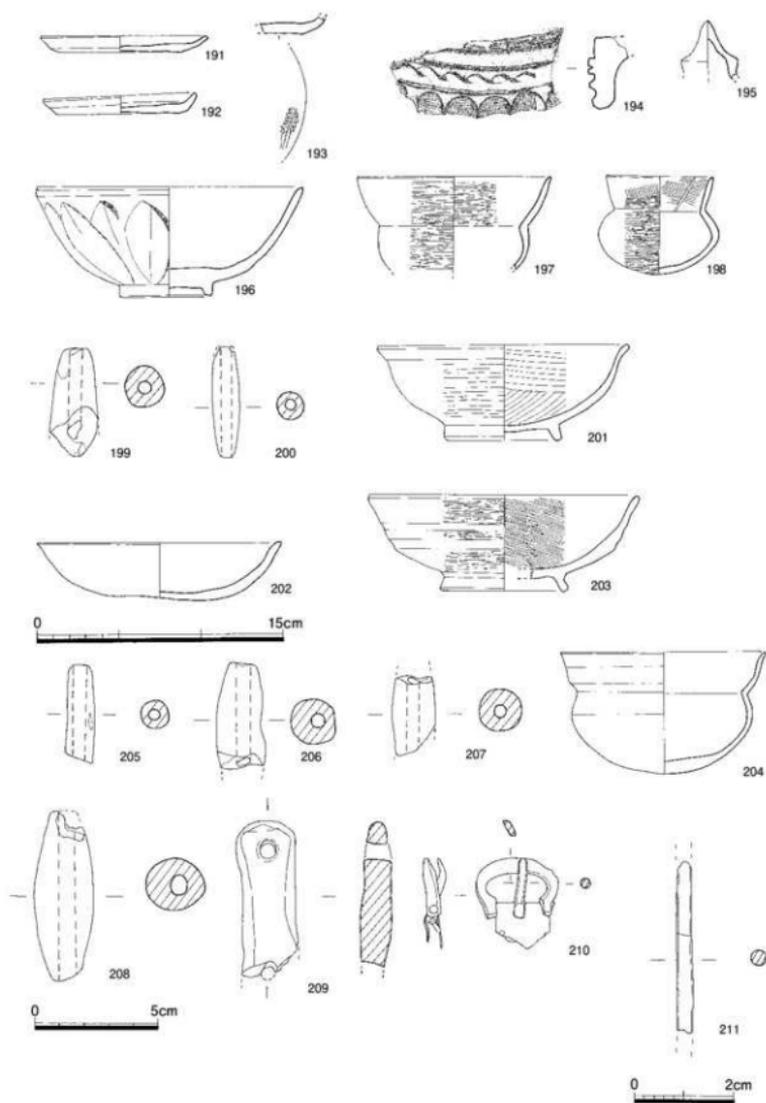


图29 包含层出土遗物实测图① (S = 1/3、1/2、1/1)

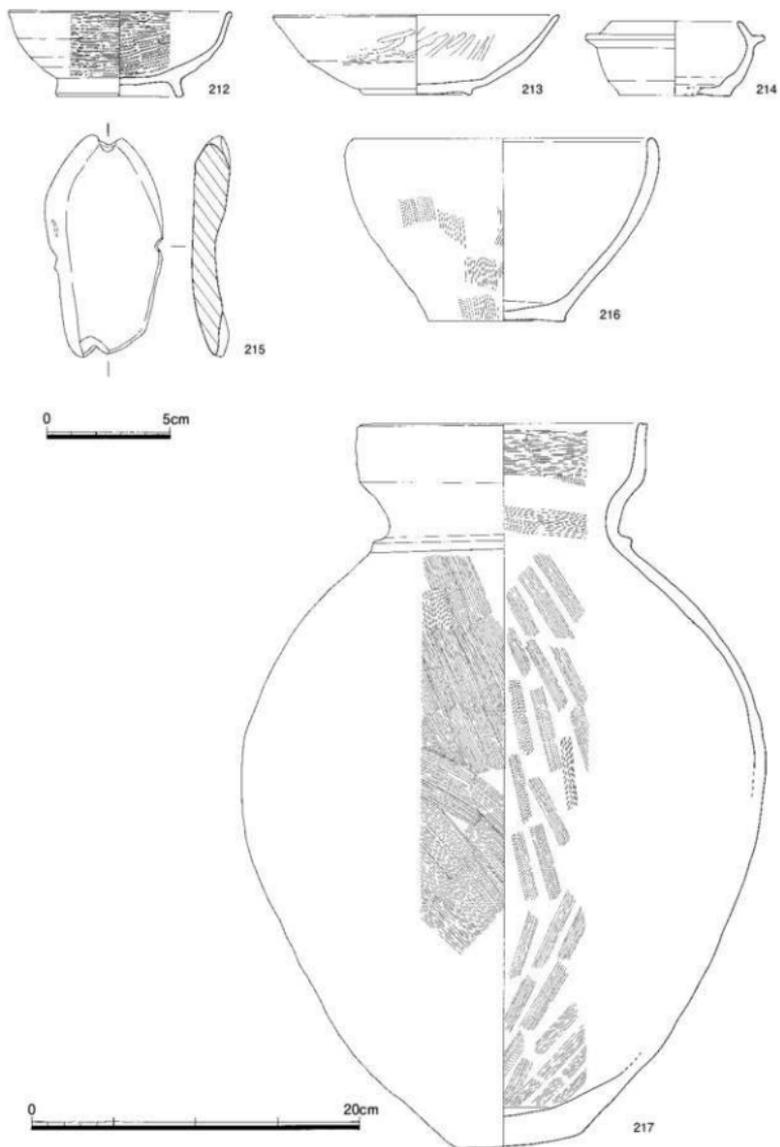


图30 包含层出土遗物实测图② (S = 1 / 3、1 / 2)

残存長35cm、径0.3cm、濃緑色を呈す。213は瓦器碗である。214は羽釜の土製模造品である。復元口径7.6cm、器高4.5cm、暗褐色を呈す。215は石鍾である。重さ74.5gで、自然礫の4個縁にV字の小切り込みを四ヶ所入れ、十字に紐を掛けたいものとみられる。216は弥生土器の鉢である。浅黄橙色を呈し、体部外面に縦方向のハケ目を施す。217は弥生土器の壺である。浅黄橙色を呈し、肩部から胴部にかけて二ヶ所相対する位置に黒斑がある。口縁部および底部付近の外面を除き、ハケ目を施す。

3 まとめ

最後に今回の調査成果について、簡略ながら時代ごとに要点をまとめ、今後の課題・問題点をあげておきたい。

今回は計2面の遺構面を調査した。第1面は12～13世紀前半、平安時代末期～鎌倉時代前半を主体とする。その中で最も特筆すべき遺構は1区で検出した磁北に直交する東西方向の大溝、SD01である。

SD01の存続時期を出土遺物と遺構の切り合いから考察する。SD01はSE08を切っている。SE08からは銅銭「乾元大寶」(968年)が出土している。SD01の出土遺物は、一部11世紀代の中国産白磁を含み、北宋銭「治平元寶」(1064年)が出土している。大量に出土した土師器皿・杯の量や、青磁・白磁の型式から12世紀、特に中葉から後半に中心があり、龍泉窯系鎊蓮弁文碗が出土することから13世紀中葉までとみられる。SD01の検出時に最上層で口禿タイプの白磁碗の破片がわずかに出土していることから、13世紀後半にはすでに機能を失い、埋まっていたとみられる。

規模は幅6m、深さ1mに及ぶ。萬行寺の東方、祇園町一帯には磁北に沿った区画遺構が広く存在し、「官衙域」として認知されてきた。古代に造られ、その後中世に至るまで博多の町割に影響を与えていると見られている。現在延長線上で同様の遺構が検出されておらず、性格の紋り込みは今後の課題であるが、SD01もその一部である可能性がある。

出土遺物は宴に使用されたとみられる土師器皿・杯が圧倒的である一方、漁に使用する土鍾や、石蹴りのような娯楽に使用した石球や土玉、磁器碗を転用した瓦玉など遊戯具も目に付く。

大溝に関連した遺構として、地鎖かとみられる青磁碗を重ね埋納した遺構SX51の存在も興味深い。青磁碗の型式から、大溝と同時に存在したことが明らかである。仮にSD01が博多の街の南限とした場合、その外側の南に位置しており、境界を示す意図でもあったのであろうか。

次に第2面は博多遺跡群の地山である黄褐色細砂の砂丘面である。第1面から第2面に至るまでに暗茶褐色砂質土層を掘り下げているが、この層には古代および弥生時代終末～古墳時代前期の遺物が含まれていた。これらの時代の遺構は大溝や井戸など後世の大きく深い遺構によって壊され、残りはわずかであるが、須恵器杯を含む奈良時代の土坑SK15、銅銭が出土した古墳時代の土坑SK36などが存在する。

古代に関しては官人の帯に使われた鉸具や、皇朝十二銭が出土しており、官衙域との関連の深さをうかがわせる。

弥生時代終末～古墳時代前期については、布留式甕の口縁部片や畿内系統の小型器台などの土器が見られる。北隣の45次調査において布留式甕を伴う堅穴建物群が検出されており、古墳時代前期前半期の集落の一部であったことがわかる。

今後に残された課題も多いが、今回の調査により、特に博多の街の区画の移り変わりを考察するうえで貴重な資料を加えることができた。



1区 第1面全景 (北西から)



1区 SD01 (西から)

図版2



SD01土層断面1 (西から)

SD01土層断面2 (西から)



SD01中央部 底面遺物出土状況 (南東から)

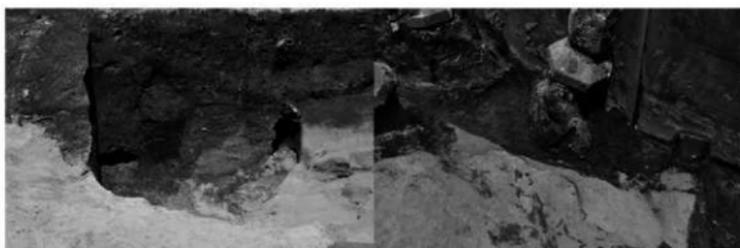


SE02 (南西から)

SE03 (北西から)

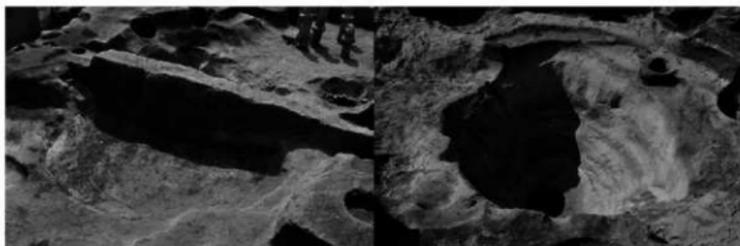


1区 第2面全景 (北西から)



SE05 (南東から)

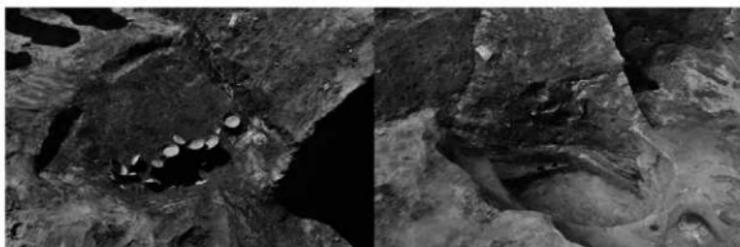
SE09 (南から)



SE08検出状況 (北東から)

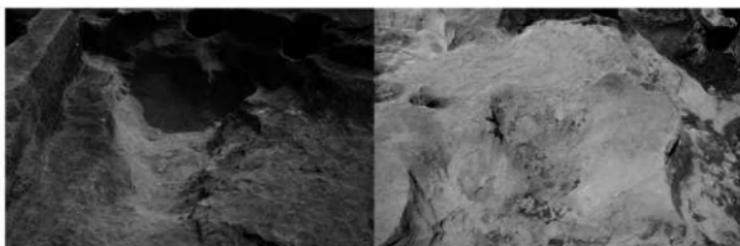
SE08 (南東から)

図版4



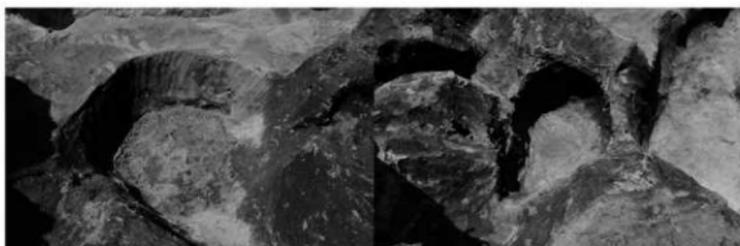
SK04 遺物出土状況 (東から)

SK04 (南から)



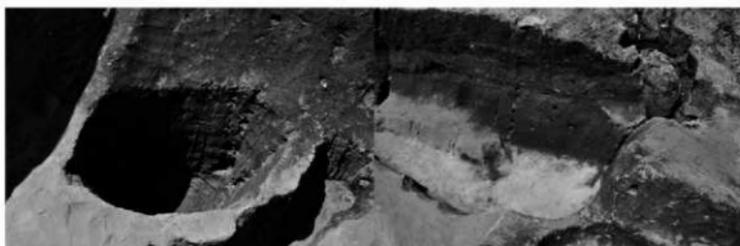
SK06 (北西から)

SK11 (南東から)



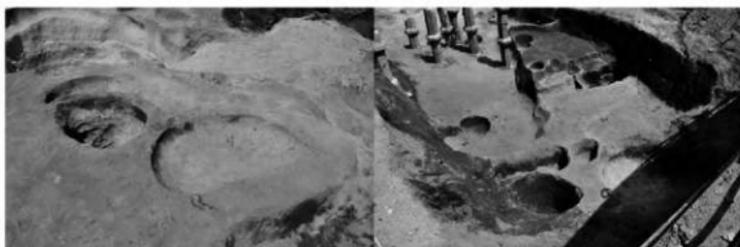
SK15 (東から)

SK17 (北から)



SK23 (南東から)

SK25 (東から)



SK27 (南東から)

SD19・22 (西から)



SD20 (北東から)



2区 第1面全景 (北西から)

図版6



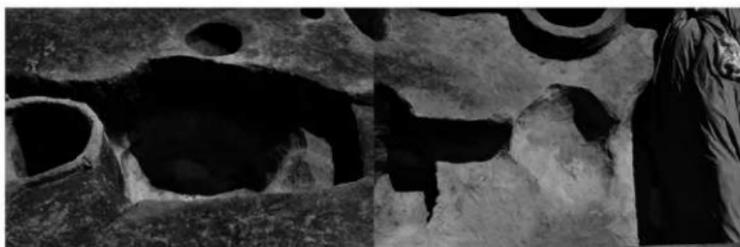
SD32 (北から)

SK31 (西から)



SK33 (南から)

SK34 (東から)



SK35 (西から)

SK37・38 (西から)



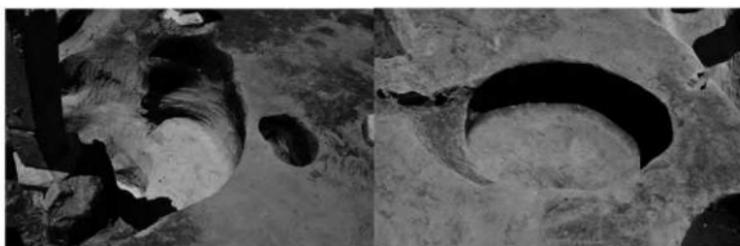
SK40 (西から)

SK42 (南から)



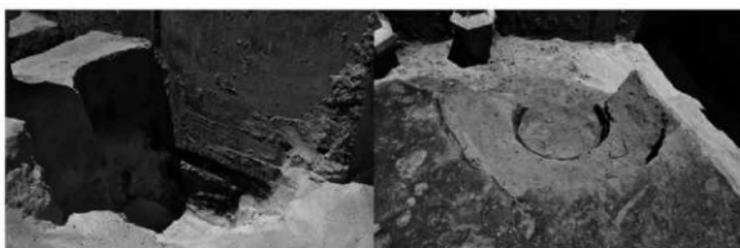
SK 43 (南から)

SK 44 (南から)



SK 46 (東から)

SK 47 (西から)



SK 52 (東から)

SE 61 (西から)



SE 30 (北から)

SE 39 (北西から)

図版8



S X 51 (南西から)



S X 51 (南東から)



2区 第2面全景 (北西から)



S K 36 (西から)

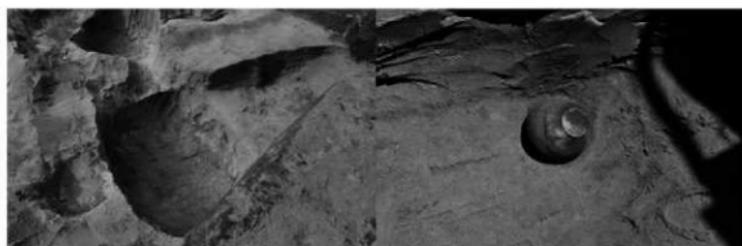


S K 41 (北東から)



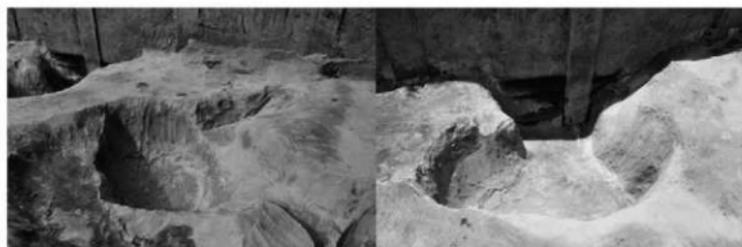
SK48・49・50 (西から)

SK55 (南西から)



SK57 (北から)

SK57西 鉢出土状況 (北から)



SK58 (北から)

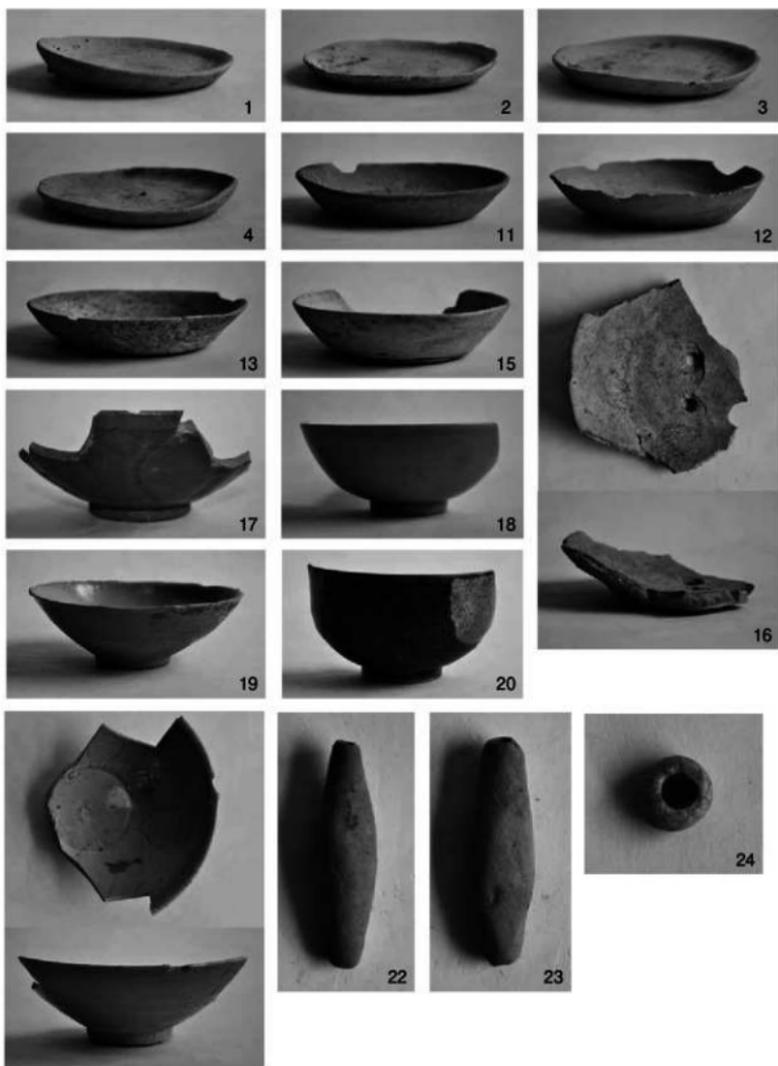
SK59 (北東から)



SD56 (南から)

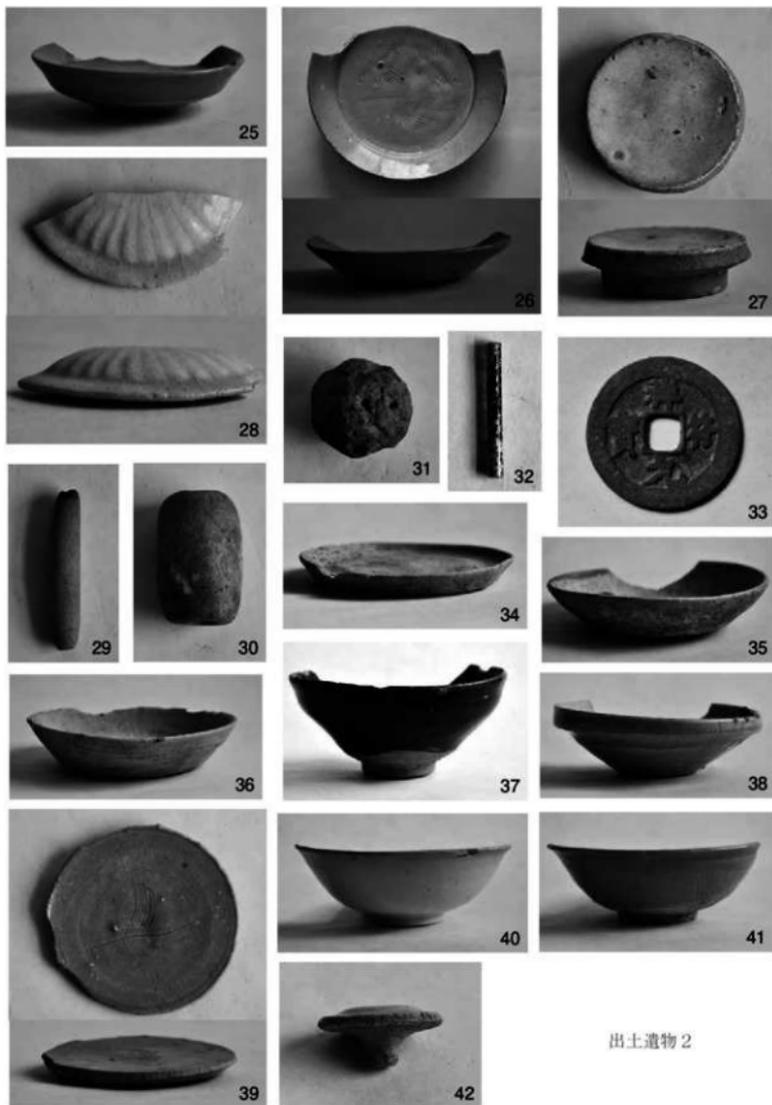
SX54 (東から)

図版 10



出土遺物 1

図版 1 1



図版 12



出土遺物 3

図版 13



出土遺物 4

图版 14



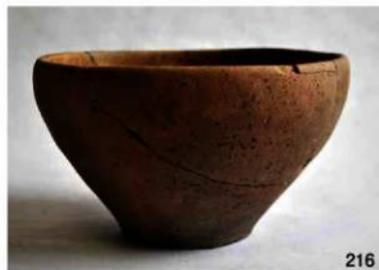
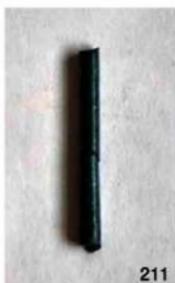
出土遺物 5



図版 16



出土遺物 7



出土遺物 8

報告書抄録

ふりがな	はかた							
書名	博多163							
副書名	博多遺跡第210次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1369集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2019年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかた いせきぐん 博多遺跡群 第210次	ふくおかしはかたぐん 福岡市博多区 ぎんまろ 祇園町	40132	0121	33° 35′ 32″	130° 24′ 44″	20170201 ～ 20170622	385	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡群	集落跡	弥生～中世	竪穴建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、中国産陶磁器、石器、金属器、ガラス製品				
要約	<p>博多遺跡群は、博多湾に面した3列の東西方向の砂丘上に立地する弥生～近世の複合遺跡である。今回の調査地点は、遺跡の南西部に位置し、最も内陸の砂丘の西側頂部にあたる。北側隣接地で3次、45次調査が実施され、中世の大溝や陶器鉢に入られた箱銭などが検出されている。今回の調査では、平安時代末期の井戸・土坑、鎌倉時代初頭の大溝を検出した。大溝は幅6m余り、深さ1m弱で、磁北に直交する方向である。磁北に直交する溝は現在の祇園町交差点付近を中心に確認されており、古代に始まり中世まで残る事例がある。今回発見の大溝は、博多の町割りの変遷を考える中で今後検討を要する貴重な事例といえる。各遺構から、完形の土師器皿、白磁や龍泉窯系・同安窯系青磁の椀・皿を中心とする中国産陶磁器、中国製銅銭や皇朝十二銭、鉄釘など金属製品、石球・基石など石製品、牡蠣の殻や動物の骨など有機質遺物が多量に出土している。また遺構は少ないが、包含層から弥生後期～古代の遺物も多数出土しており、特に古墳時代前期の土器、古代の鉤具が目される。出土遺物の総量はコンテナ123箱におよぶ。</p>							

博多163

博多遺跡群第210次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1369集
2019(平成31)年3月25日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 谷口印刷所
〒8120054 福岡市東区馬出2-2-2-23

